月刊『カーサ ブルータス』
*Life Design Magazine

キッチンを暮らしの中心に！ 理想の食空間の作り方

Casa BRUTUS

みんなが集まるキッチン。

クリエイターのキッチンは
アイデアの宝庫です。
エーロ・アアルニオ／ローズ・カラリーニ
野村友里／アンディ・クルーズ…etc.

集まって食べればもっと楽しい！
あの人のキッチン訪問。
長尾智子×高橋みどり
有元くるみ×小林節正／つむぎや×阿部勤

理想のキッチンの作り方ガイド

3
2013 vol.156
MARCH
定価880円

Eero Aarnio

名作ボールチェア、ポニー、パスティルチェアの生みの親。活躍の場は家具にとどまらず、最近はノートやタオルをはじめ生活雑貨なども積極的に手がけている。2010年にフィンランド獅子勲章を受勲。http://www.eeroaarnio.com/

フィンランドデザイン界の巨匠、

エーロ・アアルニオさんのキッチンを訪ねました。

ポニーチェアをデザインした巨匠が自ら手がけた家は湖のほとりにあります。
中でも、家のすべてが見渡せて、湖までも見通せるキッチンは家の中心です。
完成から24年、気がつけばあちこちから人が集まる場所になっていました。

photo_Jouko Vatanen　text_Keiko Morishita

ダイニングからは見えないキッチン内部にも収納が充実している。利便性を追求した。

アアルニオさんのキッチンに人が集まる理由。

POINT

風の匂いまで届きそうな抜けた空間。

上／小さなダイニングながら大きな窓と開放的な作りで、自然の近さが感じられる心地よい空間に。下左／天気の良い日にはテラスにテーブルセッティングし、湖を眺めながら食事をすることも多い。下右／キッチンにもたっぷりと自然光が差し込む。夏には窓の向こうにハーブのプランターが並ぶ。

「アアルニオはいったいどこへ消えたんだ？　最近全然姿を見せない。デザイナーを辞めたのか??」。1988年から89年ごろ、あの名作、ポニーチェアをデザインしたエーロ・アアルニオさんについて、こんな噂が飛び交ったという。その後の活躍からもわかるように、もちろんアアルニオさんはデザイナーを辞めてはいなかった。ただ、家を作っていたのだ。「デザインどころじゃなかったんだよ。なにしろ初めての新築で、没頭しちゃって」とアアルニオさんは笑う。

アアルニオさんと奥さんのピルッコさんの暮らしは、24㎡の小さな住まいから始まった。海外を含めた引っ越しが延々と続き、ヘルシンキから西へ車で30分、湖のほとりにあるこの家で落ち着いた。なんと17番目の家である。もともと森と湖しかなかった土地に、いくつもの家で暮らしながら学んだ知恵をすべて注ぎ込んだ家を88年に建て始め、89年に完成した。2人は今もここで暮らす。

手狭になった仕事場をスタジオとして増築させたほかは、どこも変えていない。キッチンも当初のまま、少しずつ思い出の品が増えていく程度だ。「これだけの家に住めば、自分たちに何が必要でどうしたいか、明らかだったからね」

キッチンを開く。

家の前は湖。まずはせっかくの絶景を生かしたいからと、湖側に大きな窓をいくつも並べた。キッチンにもたっぷり自然光がたっぷり届き、ダイニングを通して見える外の風景が気持ちよい。

POINT

アアルニオ・デザインのプロダクトが随所に。

上・左／このキッチンのためにデザインされ、アルテックの提案で商品化されたスツール。上・右上／アレッシィのボトルオープナー《マウス》。上・右下／じょうろはアレッシィ、名作ポニーをモチーフにしたトレーはプランズ・スカンジナビアのもの。左／子供用パピーチェアはマジスから出ている。

POINT

見せる収納から楽しい会話が生まれる。

上／自慢の焼き窯は薪をしっかり見せることで窯の存在感がアップ。娘の作品や旅の土産などもあって、料理を待つ間も会話が弾む。右／80歳と82歳の２人にとって重いものは腰をかがめて取り出すより、こうした方がおっくうにならないからという。長年使い続けてきた道具には数々の逸話がある。

また、家のすべての場所からキッチンが見えるようにした。ダイニングはもちろん、リビングからも、ライブラリーからも、テラスからも、シャワールームからも、そして外のスモークサウナからも(！)。キッチンからみんなの様子がよく見えるので、お互いの声もよく響くし、タイミングよく料理の準備ができる。「友達とリビングで食事することもあるんだよ」とアアルニオさん。抜けの良い家は、キッチンのサイズも自由自在に変わるらしい。

収納も見せた。フィンランドの一般的なキッチンは、食器も調理道具もすべて扉のついた棚にしまって、何もかも隠してしまう。しかし料理好きな2人はフライパンを上から吊るし、スパイスも棚に並べるなど、パッと手に取れる機能的な工夫を凝らした。

会話のきっかけを作る。

同時に、楽しい仕掛けも忘れない。ダイニングのそばにはカトラリー、ソルト&ペッパー、トレーなど、ユーモアあふれるアアルニオさんのプロダクトが並んでいる。シャンパングラスもただ飾るのではなく、アアルニオさんがデザインしたキーリングなどを入れておく。そして客と会話が弾んだら、お菓子をすすめるように「記念にひとつ」。客の反応も楽しみのひとつだ。ダイニングの本棚にはレシピ本。おやつを終えた孫たちはこれを取り出して、ピルッコさんと作ったお菓子や料理をおさらいする。こんなふうに、会話が弾む仕掛けがたくさん用意されているのが、なんともこの夫婦らしい。

POINT

見せつつ隠す絶妙なバランス。

右／作業台とカウンターに段差をつけ、調理中の様子が見えないようにした。下／作業台とダイニングテーブルにそれぞれブラシで若干のひっかき跡をつけ、自然の質感を出した。カウンターの存在感は大きく、結果として下に鍋や大皿がたくさん収納された棚が見事に隠れている。

POINT

おもてなし上手の特別な器。

1,000年以上も前から伝わるフィンランド料理はお客さんたちが楽しみにしているメニュー。木をくりぬいて器を作り塩水につけておくこと数週間。ここにラムと根菜を入れ、器のまま窯に入れて時間をかけて焼く。

もうひとつ、家電やオーブンなどの表情の少ない設備が目立つキッチンでアアルニオさんが大事にしたのは、自然のぬくもりである。

ある日遊びに来たアルテックの代表が、見るなり「権利はどうなってる?」と一言、後日あっという間に商品化されたというカウンターの木製スツールはもともと、このキッチンのためにデザインしたもの。コロンとした風貌がなんとも愛らしい。

ワークトップとダイニングテーブルも木を選んだ。表面をブラシでひっ掻き、ざらつきを出して表情をつける。この手触りはクセになる。薪を隠さずに窯の下に並べて見せたのも、同じ理由からだ。

自然と人が集まるように。

そんなキッチンだから、手際よく料理の準備をする2人のまわりにはいつも人が集まっている。リビングにいても、ダイニングテーブルを囲んで座っていても、アアルニオ夫妻の傍でおしゃべりがしたくなり、気がつけば普通よりも幅の広いカウンターのところに立っている。そうすると、ポットを片手にアアルニオさんが何かを指差し、あれこれエピソードを話す。ピルッコさんは鍋をかき回しながら、夏に摘んできて乾燥させたハーブでどんなお料理を作ったらいいか、ちょっとしたレシピを教えてくれたりする。すると、集まった客の手も自然に動き始める。

引っ越しを繰り返し、いろんな形のキッチンを体験しながら、自分たちにとって本当に必要と感じたものをもとにデザインしたキッ

右／リビングからの眺め。リビングにはアアルニオさんの名作チェアが並ぶ。右奥はライブラリーで、キッチンともつながっている。下／丸い壁の後ろはシャワー室。その奥にはサウナやランドリールームが並ぶ。この丸壁は奥様ピルッコさんのアイデア。井戸に使うコンクリートの筒を半円にして実現させた。

POINT

すべての動線がキッチンへと続く。

POINT

サウナで疲れを癒し
お腹をすかせてキッチンへ。

キッチンからテラスに出てまっすぐ階段を下りると、湖の前にアアルニオさん自身が建てた自慢のスモークサウナが建っている。サウナで体を温めて湖に飛び込み、これを繰り返しながら休憩でビールを一杯。すっかりくつろいだところで家に戻ると、おいしそうな匂い。サウナも食事をおいしくいただく秘訣のひとつ。

キッチン自体は狭いが、考え抜かれた動線とたくさんの収納が実に機能的で意外と動きやすい。キッチン、ダイニングからテラス、サンルーム、サウナへの抜けが心地よい。

チン。そこにはキッチンに立つ2人の、幸せな空気が漂っている。

「遊びに来てくれた人たちが、なぜか気づくと皆ここに集まってるのよ」とピルッコさん。大勢が集まるパーティーをしても、結局はキッチンに大集合しているのだとか。アアルニオさんは「いちど67人のお客さんが全員ここにいたことがあってね。どうやったらこの小さなところに入りきったのか、今でも不思議だけど」と笑いながら話を続けた。

キッチン作りの姿勢。

自分たちにとって本当に気持ちのよい空間を求めて、まずは先入観を捨て去り、目標に向かって全力を尽くす。アアルニオさんのキッチン作りの姿勢は、座り方や椅子の概念を覆しつつ、楽しく、心地よい名作を作り続けてきたデザイナーとしてのエーロ・アアルニオの姿勢と同じだ。そうして生まれたキッチンは、笑いの絶えないアアルニオさんの名作である。